

## 意識障害患者の安全な抑制帯の改善

### —— 各種チューブ挿入患者の上肢抑制帯について ——

小畑 章子, 相沢 恵美子, 大沢 知春  
鈴木 恵美子

#### はじめに

当脳外科病棟の入院患者のほとんどは、意識障害があり不穏状態を伴うこともしばしばである。

したがって、点滴、フォーレカテーテル、脳室持続ドレナージ、マーゲンゾンデ留置などの処置を円滑に行い、患者の安全、安楽を心がけながらも、抑制を余儀なく行なわなければならないのが現状である。

従来の紐状の抑制帯では、しめすぎによる循環不全をおこし、又ゆるすぎでは外されることが多くマーゲンゾンデ等も1日に何回となく抜かれてしまうことが見られた。

そこで、より安全、かつ確実に固定できる抑制帯の必要性を認め、その条件をみたとす、試作品を作製したので、ここに報告する。

#### 研究方法

平成2年9月1日～10月31日の期間に脳外科病棟に入院した患者で、意識障害があり、留置チューブ類の管理のために、抑制帯を必要とした、のべ9名の患者を対象とした。

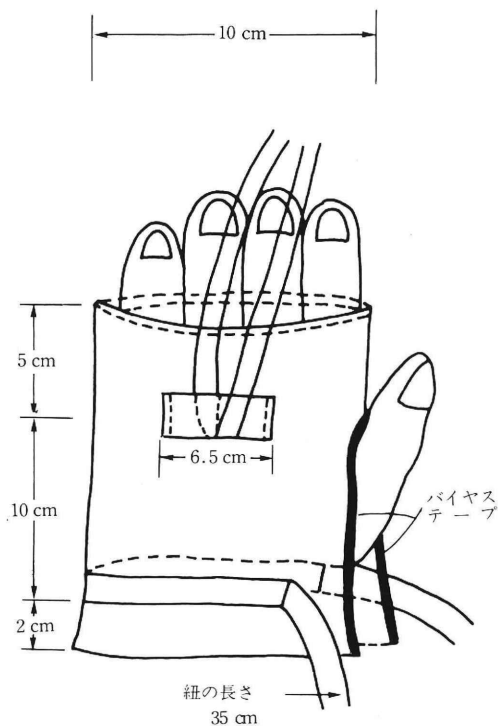
まず現在使用している抑制帯には以下の問題点が指摘された。

- 1) 長時間使用によりむすびめに緩みが生じ、患者が抑制帯を外して、留置チューブ等を自己抜去してしまう。
- 2) 体動が激しい場合徐々に紐が締って局所の循環障害をおこす。
- 3) 拘束されているという精神的苦痛。
- 4) 抑制帯装着上の手数の問題。

以上の問題点から安全な抑制帯の条件として次の条件をみとすことが必要と考えられた。

- 1) 循環障害をおこさないもの。
- 2) 丈夫で安価、かつ皮膚に対する刺激が少ないもの。
- 3) 通気性が良く洗濯しやすいもの。
- 4) 抑制帯が簡単に出来、しかも、しばられていいるという感じのないもの。
- 5) 抑制が外されにくく、かつ留置チューブ類の自己抜去を防げるもの。

上記の条件にそって検討した。



<試作品>

## 研究結果

循環障害の早期発見，指の運動制限の防止の為に指無し手袋式とし患者の手首のサイズに合わせやすくする為，紐を使用し結ぶ，その紐のしまり過ぎを防ぐ為に手首の丈を長くした。次に条件 2) 3) を満たすものとして，表地は綿，裏地はネルとした。条件 4) 5) に対しては拇指側を開く構造とした。しかし体動の激しい患者では縫い目の部分がほつれやすいため，バイヤステープで包むこととした。

## 考察とまとめ

今回，従来の抑制帯に疑問を感じ数種類の試作品を作って検討した結果，新しい型，方法による抑制帯を作製することが出来た。

これにより，抑制される側の精神的苦痛も和らぎ，抑制する側にとっても安全，安楽かつ円滑な治療と看護が行えるようになった。

この研究を通してさらに不穏があり，体動の激しい患者の抑制帯の改善が今後の課題として残された。

## 文 献

- 1) 小原真美，他：意識障害患者の安全を守る上肢抑制帯の改善，平成元年度・日本看護協会北海道・東北地区看護研究会集録，1989.
- 2) 武蔵野赤十字病院看護部：看護行為の手順（上）広川書店，1987.
- 3) 日野原重明（総監修）河合千恵子，大河原千鶴子，金井和子（責任編集）：ナースィング・マニュアル臨床看護技術編，基礎看護技術 マニュアル（I），1989.